CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Yamagata University Academic Repository

「あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツ」？
—— マルティン・ヴァルザーのエッセイをめぐって

渡　辺　将　尚

1

現代ドイツを代表する作家マルティン・ヴァルザー（Martin Walser, 1927- ）は，初期作品以来，戦後奇跡的な復興を成し遂げた西ドイツ社会に潜むさまざまな問題を作品化し，白日の下にさらしてきたことで知られているが，そのかたわら，エッセイや講演等，文学作品以外の場をも利用し，積極的に持論を展開してきた。作家ならではの比喩や，まわりくどい表現が散見するものの，それらのエッセイや講演を分析することは，ドイツ現代社会に対する彼のスタンスをより直接的に知る上で非常に興味深い。彼は，ことあるごとにさまざまな問題について論評してきたが，その中でも，戦後ドイツが抱えるいわゆる「過去」の問題はくりかえし取り上げられるテーマであり，この問題に対する彼の関心の高さがうかがえる。[1]

ヴァルザーの，「過去」の問題に対する最初期の見解を知るために重要な鍵を与えてくれるのが，「私たちのアウシュヴィッツ（Unser Auschwitz）」[2] である。この 1965 年に発表されたエッセイは，1963 年から始まったいわゆる「アウシュヴィッツ裁判」[3] を熱心に傍聴した体験を

1　ヴァルザーの「過去」を扱ったエッセイには，本稿で詳細に分析する「私たちのアウシュヴィッツ」のほかに，「ドイツ・モザイク（Ein deutsches Mosaik）」（1963 年），「幽霊たちとの握手（Händedruck mit Gespenstern）」（1979 年），「終わらないアウシュヴィッツ（Auschwitz und kein Ende）」（同）などがある。

2　遠山義孝氏は，この時期ヴァルザーがドイツの「過去」の問題に取り組み，このようなエッセイを執筆した背景について，つぎのように説明している。「（「私たちのアウシュヴィッツ」を書いた）当時はマルティン・ヴァルザーもほかの人々と同様に過去の克服，過去の清算という問題に作家活動の重点を置いていた。その頃のドイツの精神的状況は非ナチ化に関しての諸行動を促進させる一種の追い風の中にあった。戦後復興も半ば達成され，戦争を反省する余裕が社会に生まれた。したがってそのような雰囲気に包まれていたことも彼が過去の克服に取り組んだ一つの理由である。」（遠山義孝：ドイツ現代文学の軌跡　マルティン・ヴァルザーとその時代（明石書店），2007 年，103 ページ。なお，引用文中の（　）は，引用者が説明のために加えたもの。特に指示のないかぎり，後の注釈でも同じ。）

3　この裁判の概要，および意義，問題点については，石田勇治氏が以下のように簡潔にまとめているのでここに引用しておく。「1963 年 12 月，フランクフルトで始まったこの裁判は，ホロコーストの生き残り 248 名を含む 359 名に証人尋問をおこない，被告 22 名に有罪判決を宣告して 65 年 8 月に結審した。『死の工場』のおぞましい事実が，ドイツ人自身の手で細部まで明らかにされたことの意味は大きく，この裁判はその後の『過去の克服』に強い推進力をあたえた。ただし，被告はすべて犯罪に直接手を下した下手人たちで，東ドイツ政府がこだわるグロプケのようなナチ国家の権力中枢にいた大物——『机上の殺人者』——は被告席にはいなかったのである。」（石田勇治：過去の克服　ヒトラー後のドイツ（白水社），2002 年，178 頁。）

もとに生まれたものである。[4] このエッセイの中で，ヴァルザーは，当時の西ドイツにおいて，アウシュヴィッツで行われた犯罪が一部の人間たちによってのみ実行された，異常な行為としてしか捉えられていないことを指摘している。アウシュヴィッツの犯罪を異常な行為として捉えることが，「自分はアウシュヴィッツとは関係ない」という意識を喚起する原因となっているのだという。その上で，ヴァルザーは，国家の名のもとに行われた犯罪は，国家，およびその国家を構成している国民全体によって償われ，反省され，原因が追究されなければならないと主張する。

このように大枠だけを追っている限り，このテクストは，ドイツの「過去」の問題に率先して取り組み，ドイツ人が取るべき態度について模範的な回答を示してくれているように見える。しかし，実際このテクストは，内部に矛盾をはらみ，「過去」という問題の困難さを同時に示してもいる。テクスト内部における矛盾とはどのようなものだろうか。以下の引用を見てみよう。

「明らかに私たちは，犯罪行為は償われうるものであるといまだ信じている。この，あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツという犯罪までも！」[5]

ここで，ヴァルザーは，アウシュヴィッツを清算しようとする当時の社会風潮に警鐘を鳴らしている。アウシュヴィッツは清算され得ない，というのがこのテクストにおける彼の立場である。ところが，彼はこの文脈において，アウシュヴィッツを「あらゆる既存の概念を超えた」犯罪（„diese über jeden bisherigen Begriff gehende Tat Auschwitz“）であると言っている。すでに述べたように，アウシュヴィッツの犯罪を異常なものと捉えないことは，「自分はアウシュヴィッツとは関係ない」という意識から脱却するために重要な態度であった。したがって，アウシュヴィッツを「あらゆる既存の概念を超えた」ものであるとすることは，このテクストが批判する一般市民の思考法に結局は陥り，多くの言葉を費やして論証してきた主張を自ら疑問に付していることになる。では，なぜ同一テクストにおいて，一度提示されたものがふたたび疑問に付されるという奇妙な現象が起こらなければならないのだろうか。以下では，まずテクストに沿ってヴァルザーの主張を概観し，ついでこの矛盾点について考察する。

2

前述のように，このエッセイは，「アウシュヴィッツ裁判」を傍聴した体験に基づいている

4　この裁判が，ヴァルザーにとってだけでなく，当時社会的にも大きな関心の的であったことを示す興味深い報告がある。「審理期間中，のべ約 2 万人の傍聴者が訪れたと概算されている。その中には，審理の行方を自分の目で確かめるために，定期的に法廷に通う者たちもいた。」(Gerhard Werle, Thomas Wandres : Auschwitz vor Gericht. Völkermord und bundesdeutsche Strafjustiz. München(C .H. Beck) 1995. S. 42.)

5　Martin Walser : Werke in zwölf Bänden. Frankfurt am Main(Suhrkamp) 1997. Bd. 11. S. 171. 以下，Werke と略し，巻数とページ数のみを示す。

が，彼が最初に問題視するのは，マスコミの「アウシュヴィッツ裁判」の取り上げ方である。彼は，アウシュヴィッツについて報道する際のマスコミの特徴として，被告たちを好んで悪魔と形容していることを指摘している。裁判の様子を報道する新聞記事によって，アウシュヴィッツで行われた犯罪は，しだいに一般市民にも知るところとなった。被告たちが悪魔と形容されるのは、それらの犯罪がもたらした衝撃に対する一般市民の自然な反応であったとも言えよう。しかし，ヴァルザーはここに大きな問題を見い出している。まず，なぜマスコミは被告たちを悪魔と形容するのか，以下の 2 つの引用からヴァルザーの説明を聞こう。

「SS の下士官たちを『悪魔』や『けだもの』と考え，・・・アウシュヴィッツを『地獄』とする傾向はいったいどこから来るのであろうか。きっと，報道する者にとってアウシュヴィッツが現実のものではないことも原因の 1 つなのだろう。」[6]

「私たちが『抑留者たち』の状況に考えを至らせることができないから，また，彼らの苦しみの大きさがあらゆる既存の概念を超えたものであり，それゆえ私たちが直接の実行犯から人間的なものをイメージすることができないから，アウシュヴィッツは地獄であり，実行犯は悪魔なのである。」[7]

1 つ目の引用文の最後はかなり控えめな言い方がされているが，2 つ目の引用文を合わせて読めば，ヴァルザーがこの解答を確信をもって提示していることが分かる。彼によれば，マスコミが被告たちを悪魔と形容するのは，抑留者たちが「あらゆる既存の概念を超えた」苦しみを味わったアウシュヴィッツという場を，現実のものとして捉えることができず，そういった犯罪を実行した人物にもはや人間性を見いだすことができないからである。ただし，このことは単にマスコミだけに当てはまるものではない。ほぼ同じ主張が，2 つ目の引用文において，「私たち」を主語にして語られている。結局は，西ドイツ社会全体が同様の見方でもって「アウシュヴィッツ裁判」を受け止めていることになるのである。

　では，このような見方がもたらす問題とは何なのだろうか。

「アウシュヴィッツに関する報告が恐ろしければ恐ろしいほど，私たちとアウシュヴィッツと

6　ibid. S. 160.

7　ibid. S. 161. この引用でも，我々が冒頭で問題として取り上げた「あらゆる既存の概念を超えた」（„...weil das Maß ihres Leidens über jeden bisherigen Begriff geht...“）という表現が使用されている。しかし，ここで「あらゆる既存の概念を超え」ているのは，アウシュヴィッツで行われた犯罪ではなく，「彼ら」，つまり抑留者たちの苦しみである。ほぼ同一の文言を使用しているものの，この使用法には問題がないと見るべきであろう。また，この文の意図は，そのようなとらえ方をすることによって思考を停止してしまっている一般市民を批判することにあるから，冒頭に提示したような，一般市民と同様の思考法に自ら陥っているという問題も生じてはいない。

の隔たりは，自ずからより明確なものになる。」[8]

被告たちが悪魔として，アウシュヴィッツが地獄として繰り返し語られれば語られるほど，「私たち」とアウシュヴィッツとの隔たりは確固たるものとなっていく。

「報道の際，被告たちが『悪魔』，『死刑執行人』，『けだもの』と形容されるのも故なきことではない。私たちのうちのいったい誰が，悪魔であり，死刑執行人であり，けだものであろうか。」[9]

被告たちは悪魔であるが，一般市民はそうではない。そのような線引きが，自分は関係ないという意識を生む元凶である。ヴァルザーは，執筆当時の西ドイツ国民が感じていた，この「アウシュヴィッツとの隔たり」こそが最大の問題であると見ていたのである。[10]。

そうして「アウシュヴィッツとの隔たり」ができてしまったその先に待っているのは，もはや忘却でしかない。

「アウシュヴィッツを，個人によって主体的に行われた残虐行為の集合としてしか認識しないならば，私たちはすぐにまたアウシュヴィッツのことを忘れてしまうことだろう。」[11]

犯罪者たちを悪魔と形容し，彼らの犯罪を「個人的な犯罪として，私たち国民をとりまく状況から解放」[12] してしまうと，アウシュヴィッツは単なる残虐な行為の集積ということになる。そのような過程をたどって，原因の究明からも，責任の糾明からも切り離された犯罪は，もはや忘れ去られるのみである。

3

このエッセイにおいて，ヴァルザーがもっとも問題視するのは，人々の「アウシュヴィッツとの隔たり」であり，その意識は，アウシュヴィッツを異常なものと捉えることに起因するものであった。アウシュヴィッツを異常とすることで犯罪者は悪魔となり，犯罪者が悪魔となることで，犯罪は個人のレベルで行われたものとなるのである。

8　ibid. S. 159.
9　ibid.
10　Dieter Borchmeyer は，「私たちのアウシュヴィッツ」というタイトルが，すでにこの「アウシュヴィッツとの隔たり」に対する批判的立場を表明したものになっていると見ている。彼は，このエッセイにおけるヴァルザーの見解をまとめた箇所で，以下のように述べている。「人々は，アウシュヴィッツとドイツ人との間の関係を絶ち切り，アウシュヴィッツが『わたしたちのもの』であったということを意識から排除しているのである。」（Dieter Borchmeyer : Martin Walser und die Öffentlichkeit. Frankfurt am Main(Suhrkamp) 2001. S. 27.）Borchmeyer に従えば，アウシュヴィッツをふたたび「私たちのもの」として意識させるのが，このテクストの意図ということになる。
11　Martin Walser: Werke. Bd. 11. S. 165.
12　ibid. S. 164.

しかし，ヴァルザーの主張に沿って読み進めていく読者は，ある箇所で彼の論理がはらむ二面性に出会うことになる。その発端は，彼が提示した以下の疑問にある。

「私たちが，日常の強盗殺人や強姦殺人を，犯人が刑務所に消えるとすぐに忘れてしまうのはなぜだろうか。」[13]

ヴァルザーは，この問いに対してすぐに自ら解答している。我々が日常の犯罪を簡単に忘れてしまうのは，犯罪の細部にしか注意を向けないからである。通常，我々が日常で犯罪報道に接したとき，その犯罪が実行犯によって具体的にどのように，あるいはどこで実行されたのかに注目する。しかし，そのようにして犯罪に接している限り，我々はすぐに個々の犯罪のことは忘れてしまう。

「私たちは，どぎつい新聞見出しの単なる消費者として，そこに関わることになるのであろう。しかし，そういった見出しも，新しい見出しに取って代わられることによって忘れ去られるのだ。」[14]

これらの犯罪を目の当たりにして我々がしなければならないのは，その犯罪を可能にしたものは何だったのか，よく考えることである。

ヴァルザーが，このように日常の犯罪を持ち出したのは，より身近な話題を用いて，アウシュヴィッツの忘却の危険性について触れた際に自らが展開した議論の正しさを証明するためであろう。彼は，アウシュヴィッツの犯罪が忘れ去られる原因として，それらが個々の犯罪者の行った残虐行為の集合としてしか捉えられないことを挙げていた。同じことが日常の犯罪についても言えるというわけである。日常の犯罪も，個々の犯罪の集積として見ている限り，その要因にまで深く分け入って考察することは難しい。しかし，この論法は，その利点とともに，明らかに欠点をはらんでもいる——日常の犯罪を引き合いに出すことによって，アウシュヴィッツと日常の犯罪が同列に置かれることになるのである。両者とも，抱えている問題はまったく同じである。つまり，いずれも，それを可能にした条件について深く考察されなければならないものでありながら，細部にのみ注意が向けられることによって，単に一時的な興味をそそるだけで後は忘れ去られるという，同じ問題に収斂してしまうのである。

ところが，この時点でのヴァルザーは，まだこのことに気づいてはいない。ここまでの彼の立場は，アウシュヴィッツを異常なものとして遠ざけないことであるから，日常の犯罪に引きつけて語ることに何ら矛盾を感じることはないのであろう。それを裏付けるように，彼はこの

13　ibid. S. 165.
14　ibid.

後も，アウシュヴィッツを個々の犯罪の集積と見ることがどれほど誤りに満ちた行為であるかについて語り続ける。

「このような残虐行為の集積は，私たちの意識に届いたのであろうか。私たちに，ファシズムとは何かを教えてくれたであろうか。」[15]

これ以降，議論は，現在もなおすべてのドイツ国民に突きつけられているアウシュヴィッツという課題に対して，どのように取り組めばよいのかに移っていく。その際，ヴァルザーの主張は，「集団的罪」と「罪の清算」という 2 つの点をめぐって展開される。まず，「集団的罪」について，以下の引用を見てみよう。

「ひとりの小市民を重大な殺人者に変える人間がいたら，その人間は，殺人を犯した者と同じように責任がある。殺人が起きたことによって多くの金を荒稼ぎし，今ふたたびコンツェルンを立ち上げ，工場を経営している人間がいたら，その人間もまた，多くの殺人へ関与した罪をせめて公の場で問われるべきなのだ。」[16]

この考え方自体新しいものではないが，この箇所には多少補足が必要である。ヴァルザーは，引用の 1 行目で「ひとりの小市民を重大な殺人者に変える人間がいたら」と言っているが，もちろん，これによって特定のあるいは一部の人間を指しているのではない。ここで名指しされているのは，ある人間を犯罪者に変える土壌作りに関与した者，つまりすべてのドイツ人ということになる。この文脈で、すべてのドイツ人が糾弾の対象となっていることは，つぎの引用文でより明確になる。

「私たちは・・・1933 年から 1943 年まで，私たちの目の前で一歩一歩事が進められていったとき，少なくとも寛容な目撃者であったことを忘れているのだ。」[17]

まったく関わりを持たなかったように見える者たちにも，傍観していたという罪はあるのだという。この「集団的罪」の考え方は，たしかにアウシュヴィッツを一部の人間たちによる異常な犯罪として遠ざけている限り，到達するのは難しいものであろう。アウシュヴィッツという現象だけでなく，その要因にまで追及の手をのばしてはじめて可能となるものである。この議論だけを見る限り，ここまでの時点において，ヴァルザーが行う問題提起，およびそれに対する

15　ibid. S. 166.
16　ibid. S. 169.
17　ibid. S. 167.

処方箋は，ともに見事に呼応しているように見える。[18] しかし，第二の，「罪の清算」をめぐる議論まで来たとき，我々は，すでに上で見た，彼の主張がはらむ二面性——アウシュヴィッツを日常の犯罪と同列に置くことから生ずる二面性——が，ついに主張そのものを自ら破綻に追い込むのを目にすることになる。

4

ヴァルザーによれば，人々は，アウシュヴィッツの犯罪者たちを悪魔と呼びながら，その一方で，裁判において彼らに宣告された刑罰が過大であると考えている。悪魔と形容されるほど残虐な行為をした人間なら，それに相応する重い刑罰が宣告されて当然であろう。しかし，人々はそうは考えないのだという。この一見矛盾とも思える感情の根底にあるものは何だろうか。その答えとして，ヴァルザーは以下の点を指摘する。それが，冒頭に引用した文である。

「明らかに私たちは，犯罪行為は償われうるものであるといまだ信じている。この，あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツという犯罪までも！」

「犯罪行為（eine Tat）」は，不定冠詞つきの名詞として使用されており，特定の犯罪行為を指しているのではない。この文は，アウシュヴィッツだけでなく，犯罪行為一般に対する人々の態度として述べられている。つまり，人々は，どんな罪でもかならず償われうるという信念を持っており，それをアウシュヴィッツにも適用しているのである。その結果，アウシュヴィッツも他の犯罪同様，清算可能なものとなる。

この引用におけるヴァルザーは，明らかに，アウシュヴィッツは他の犯罪とは異なり，清算不可能なものであると考えている。アウシュヴィッツは「あらゆる既存の概念を超え」たものであるから，他の犯罪と同列に並べ，一般論として片付けるわけにはいかないのである。しかし，我々は，ここで彼の立場が 180 度転換していることに気づく。アウシュヴィッツを異常なものとしないために，日常の犯罪の例を持ち出し，身近なものに引きつけて議論を展開した努力が，この引用文によって見事に帳消しにされているのである。

それ以降の文脈には新しい主張は何もない。このエッセイは、アウシュヴィッツが他の犯罪

18　ヴァルザーは「集団的罪」について語ることによって，内部に重大な罪を抱えながら，表面上経済的な繁栄を謳歌している西ドイツ社会全体にまで批判の対象を広げていると言える。また，このような問題意識は，このエッセイだけでなく，彼の最初の小説『フィリップスブルクの結婚』（1957 年）にも見ることができる。この小説において登場人物たちの結婚生活は明らかに破綻している。しかし，だからといって「結婚生活の破綻は，あたりまえのことになっているわけではない。幸福な家庭という見せかけのかげに隠されている。それを描くことによって，ヴァルザーは，中産階級の二重のモラルを批判しているのである。彼らの厚顔さへの批判は二次的なものである。」（Ludger Claßen : Satirisches Erzählen im 20. Jahrhundert. Heinrich Mann・Bertolt Brecht・Martin Walser・F. C. Delius. München(Wilhelm Fink Verlag) 1985. S. 120.）見せかけによって社会の中で生きる人間たちを批判しているという点で，両者の視点は同じである。

と区別されたまま終わりを迎えることになる。

「私たちの中の非社会的なものは，その粗野でありながら抜け目のない実行者を今後も持ち続けるのだ。目下，それがどんなに秘密にされていようと，（いずれふたたび）結集されることだろう。もちろん，アウシュヴィッツは二度と繰り返されない。反社会的なもののつぎなる勝利は，別な形で準備されるであろう。」[19]

ヴァルザーが指摘したような問題にドイツが今後も気づかず，それを放置するならば，ドイツ人の中に現時点では眠っている「非社会的なもの」がふたたび目を覚まし，行動し始めるであろう。しかし，ヴァルザーは，たとえそうなったとしても，アウシュヴィッツのような形をとることは決してないのだという。このような確信がどこから来るのか，テクストには具体的な理由付けはないが，すでに我々にとっては明確である。アウシュヴィッツは「あらゆる既存の概念を超え」た，日常の犯罪とは明らかに異なるものである。そのような日常を大きく逸脱した出来事が起こることはもはやあり得ないのである。[20]

アウシュヴィッツを異常なものと捉えることに再三警鐘を鳴らしてきたヴァルザーが，なぜここで「あらゆる既存の概念を超え」たと，定義し直さなければならなかったのだろうか。その発端は，日常の犯罪の例を持ち出した箇所にまでさかのぼる。そこでの関心事は，忘却をめぐるものであり，アウシュヴィッツが異常なものと位置づけられている以上，日常で起きる犯罪同様，忘却の危険にさらされていることが指摘されていた。このように，忘却をめぐって議論が展開されている限り，アウシュヴィッツが日常の犯罪と同列に置かれようと，まったく問題は生じない。どちらも簡単に忘却されてはいけないものだからである。

ところが，議論がそのままの状態で清算という話題に移行すると事情は一変する。アウシュヴィッツと日常の犯罪が同列に置かれたまま清算について語られるならば，アウシュヴィッツも，日常の犯罪同様，いずれは清算可能なものとなってしまうのである。すでに見たように，ヴァルザーは，アウシュヴィッツの清算に関しては，不可能であるという立場である。「あらゆる概念を超え」たという言葉は，いったん日常の犯罪と同等になってしまったアウシュヴィッツを，ふたたびそこから切り離すためのものであった。その結果，アウシュヴィッツの位置づけが 180 度転換し，矛盾をはらむものとなったのである。アウシュヴィッツはどのようなもの

19　Martin Walser: Werke. Bd. 11. S. 172.

20　筆者は，クリストフ・メッケル（1935- ）の散文作品『隠し絵——父について』（1980）を取り上げ，作品成立当時のドイツ人が持つ「過去」への意識を詳細に分析したことがある。（拙論：「裏返しのサクセスストーリー——メッケルの『隠し絵』に見る戦後ドイツ」〔「山形大学紀要（人文科学）」第 15 巻第 3 号〕2004，91～102 頁。）この作品は，第 2 次大戦中，知識人としてナチズムの危険をいち早く感知しなければいけない立場にありながら，ただ傍観するのみであった父親を痛烈に批判することに主眼を置いたものである。しかし，本論文では，そのような父親批判のかげに，西ドイツはすでに過去を克服し健全に戻ったのだという意識が強く働いていることを明らかにした。ここで詳細に分析する余裕はないが，すでにこの時期のヴァルザーにおいても，同様の意識が根底にあった可能性は大いに考えられる。

と捉えられなければならないのか，このテクストにおいてもっとも重要であるはずの問いに対するヴァルザーの最終的な答えは，もはや探し出すことができない。

5

ヴァルザーが言うように，アウシュヴィッツを一部の人間たちが起こした異常なものであると捉えれば，人々がそのようなことは二度と起きるはずがないと考えるのは当然である。しかし，その一方で，我々の中にいたごく普通の人間たちが起こした，原因も理由もある犯罪であると捉えれば，[21] アウシュヴィッツはこれまで繰り返されてきた犯罪の一部となってしまう。日常の犯罪とふたたび切り離したければ，アウシュヴィッツを異常性のあるものと捉えるしかない。このエッセイにおけるヴァルザーの議論がたどってきたのは，まさにこの過程であった。

ところが，最終段落で，アウシュヴィッツの位置づけはもう一度転換している。実は，すでに引用した文の中にそれを示す部分があった。

「私たちの中の非社会的なものは，その粗野でありながら抜け目のない実行者を今後も持ち続けるのだ。目下，それがどんなに秘密にされていようと，（いずれふたたび）結集されることだろう。もちろん，アウシュヴィッツは二度と繰り返されない。反社会的なものの次なる勝利は，別な形で準備されるであろう。」

アウシュヴィッツは，我々の中に潜む「非社会的なもの」が何らかの理由により氾濫を起こした結果生じたものである。ドイツ人がこのまま何の反省も行わなければ，この「非社会的なもの」はふたたび氾濫を起こすことになる。だとすれば，アウシュヴィッツは，これまでくり返し起きてきた，あるいはこれからも起こるであろう「非社会的なもの」の氾濫にすぎず，その氾濫がこれまでとまったく違った規模で行われたのであれば，それは突然変異によるものであるということになる。ここで，アウシュヴィッツはふたたび日常の犯罪と同等の位置に落とされている。

結局，このテクストにおいて，アウシュヴィッツは二度その位置づけを変更されていることになる。一度目は，「この，あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツという犯罪まで

---

21 「私たちのアウシュヴィッツ」から 30 年近くを経た 1992 年のあるインタビューにおいても，この立場に立った発言が見られる。ヴァルザーは，ナチス時代の SA と現代のネオナチの行動を比較して，以下のように述べている。「SA の連中は，今日街頭に繰り出して人々を傷つけている者たちとは違って，たくさんのイデオロギーの上に立っていました。彼らは，ヴェルサイユ条約や，人種差別的なえせ理論や，社会における寄る辺なさなどを引き合いに出してくることができたのです。」（„Ich habe ein Wunschpotential.“ Gespräche mit Martin Walser. Herausgegeben von Rainer Weiss. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1998. S. 37.）本論に記したように，アウシュヴィッツ（もちろん，アウシュヴィッツだけでなく，ナチズムの名の下に行われた犯罪すべてが念頭に置かれている）を原因のある犯罪と捉えることは，場合によっては危険性をも兼ね備えたものであるが，このヴァルザーの基本的立場には変化がなかったと言える。

も！」という文言によって，二度目は，この最終段落においてである。このように，アウシュヴィッツのとらえ方がたえず変動し，固定されないのは，どちらのとらえ方にもメリット，デメリット双方が存在するからである。エッセイ「私たちのアウシュヴィッツ」は，アウシュヴィッツ，およびドイツの「過去」を問題とする際にヴァルザーが陥ったジレンマを露呈させるとともに，この問題が 1 つの解決策によって容易に片付けられるものではないことを示すテクストでもあると言える。

Ist Auschwitz eine „über jeden bisherigen Begriff gehende Tat“ ?

—— Martin Walsers Essay „Unser Auschwitz“

Masanao WATANABE

Seit seinen ersten Romanen und Erzählungen bringt Martin Walser(1927-) Probleme in der westdeutschen (nach der Wiedervereinigung: deutschen) Gesellschaft an den Tag. Daneben schreibt er auch viele Essays, wo er sich zu verschiedenen Themen entschieden äußert. Die deutsche „Vergangenheit“ ist eines der meist diskutierten Themen.

Das wichtigste Material, um seine Ansichten über dieses Thema in der ersten Periode zu untersuchen, ist „Unser Auschwitz“. In diesem Essay kritisiert er, dass man das Bewusstsein hat, mit den Taten in Auschwitz nichts zu tun zu haben, indem man sie als allzu außergewöhnlich betrachtet. Er behauptet, dass man ihnen nicht ausweichen solle und die Gründe, die Auschwitz ermöglicht hätten, untersuchen müsse.

Aber im Text gibt es eine problematische Aussage: „Offenbar glauben wir noch immer, eine Tat könne gesühnt werden. Und nun gar diese über jeden bisherigen Begriff gehende Tat Auschwitz!“ Er sagt, Auschwitz gehe „über jeden bisherigen Begriff“. Das bedeutet, dass hier Walser selbst Auschwitz als außergewöhnlich betrachtet. Und ohne Zweifel steht diese Aussage seiner bisherigen Behauptung entgegen. Warum muss er die widersprüchlichen Aussagen machen?

In den vorangehenden Paragraphen hat er zum Thema, ob Auschwitz auszugleichen sei. Seine Antwort ist: Nein. Er macht jene problematische Aussage, um an der Zeitströmung Kritik zu üben, dass Auschwitz einmal ausgeglichen werden könne. Er behauptet zwar, dass man Auschwitz nicht als außergewöhnlich betrachten solle, aber, wenn man mit dieser Stellungsnahme über den Ausgleich der „Vergangenheit“ diskutiert, entsteht damit ein großes Problem: Auschwitz ist ebenso ausgleichbar wie andere Taten, die alltäglich geschehen, weil es nicht außergewöhnlich ist. Jene problematische Aussage hat die Absicht, dieses Problem zu vermeiden, aber eben darum entsteht ein Widerspruch. Walsers Behauptungen geraten in ein Dilemma: Wenn Auschwitz außergewöhnlich ist,

denkt man, dass man damit nichts zu tun hat. Wenn es doch nicht außergewöhnlich ist, sind die Taten ausgleichbar.